



初芝立命館中学校・高等学校

英語で学び、思考し、発する HATSURITSU ENGLISH METHOD

今日、世界の人々と共に考え行動することが当たり前になりつつあります。中高の教育現場でも、世界の変化に合わせた新しい英語教育の取り組みが切望されています。初芝立命館中学校・高等学校の独自の英語教育プログラムについて国際教育部長の三井淳美先生にお話を聞きました。



生徒によるプレゼンテーション



Global English Camp



オンライン英会話

独自の英語教育プログラムをスタートさせた背景は？

今の生徒たちが社会で活躍する頃、日本国内の少子化の影響もあり、世界の人々と協同する機会はより一層増えています。

またAIもさらに進化しているので、人間がなすべきことは「創り出すこと」「ともに考え、力を結集すること」となり、それが仕事の中心となっていることでしよう。

そのため、「みんなで力と知識を合わせれば、問題解決ができる」という体験を中学校、高校という価値観の柔軟な時期に積んでいく必要があります。

海外学生と共に学ぶ取り組みがあるそうですね。

中学校では1年次から3年次まで、毎年2日間の「イングリッシュ・イマージョン・キャンプ」を実践しています。2年次のキャンプでは、一学年約120人の生徒に対して、立命館アジア太平洋大学（APU）の海外学生10～12名に来てもらい、共同作業に取り組みます。

SDGsのテーマから自分たちの興味のあることを選び、日本とは異なる社会・文化の考え方に接しながら、最後はそれぞれの考えや提案を英語で発表します。それらの集大成として、3年次には2週間のカナダ海外研修にも参加します。

普段の英語教育の特徴は？

中学校では、一週間に6時間ある英語の授業のうち、3時間をネイティブ教員が担当します。オールイングリッシュの授業に、私たちも最初は不安があったので日本人教師をサポートに付けていますが、生徒たちは2学期にもなると、日本人教師の手伝いが不要になり、ネイティブ教員と英語でやりとりしています。また、2017年度からオンラインでの英会話学習も導入しました。

生徒たちの成長や世界への挑戦を教えてください。

高校でも、立命館コースを対象に「グローバル・イングリッシュ・キャンプ」を実施しています。枠組みは中学と同じですが、やはり高校生になると興味を持つテーマがより高度になり、社会問題等に鋭く切り込みます。2年次には、希望者対象でカナダの名門ブリティッシュコロンビア大学で、アウトプット型の海外研修を行っています。生徒4・5名に対して現地学生がバディーに付いて、色々な活動と一緒にいきます。人権意識の高いカナダの"Greenest City"バンクーバーで環境問題や人権問題をテーマに学びを深めます。これらの取り組みもあり、ターム留学(3か月)に挑戦する生徒が増えています。また、本校から5期連続で文科省主催の「トビタテ！留学JAPAN」に生徒が採択されています。

新しい英語教育が目指すところはどこでしょう？

従来の日本の教育は、正解があらかじめ決まっている知識の記憶に重きを置いてきました。留学した生徒が口を揃えて言うのは「英語力では困らなかった。一番困ったのは『自分の考え』がないこと」。海外では、授業の最後にディスカッションがあり「あなたはと思う？」と聞かれます。今まで日本の学校では授業を受けて、どう考えるか？ その授業に対する自身の意見は？などと聞かれることはありませんでした。授業を受け身で聞くのではなく、授業後どうやって思考をさせるのかできていないこと、これが世界に大きく遅れている点ではないでしょうか？

世の中の変化は急激です。私たち教員の間でも「自分たちが受けてきたのと同じ教育を生徒にしていればダメだ」とよく話します。試行錯誤しながら、どうすれば生徒が興味を持ち、考える授業ができるのか、日々取り組んでいます。



カナダ研修

MESSAGE

自分の可能性を自分で諦めず、自分が持っているポテンシャルを信じてチャレンジしてください。将来の可能性というのは誰にもわからないものです。例えば、数学の成績が良くないからといって、理系に向いていないとは限りません。中学校や高校で習うのは学問のほんの入り口に過ぎないのです。「常識」とされる価値観に縛られず、失敗することを恐れずにチャレンジできる生徒を本校では歓迎します。

三井 淳美 先生
2020年度より中学主幹。英語科主任、国際教育部長として中高の海外研修、国内の英語研修を企画運営。「トビタテ！留学JAPAN」をはじめ、奨学金を活用した海外留学を推進。多くの学生を海外に送り出している。多様な進路選択が広がるなか、海外大学への進学サポートを推し進めている。